

句集

飛

燕

古谷

たか子

序

親愛なる句輩である古谷たか子さんが初句集を編まれることになった。

ウェブサイト『ゴスペル俳句』のメンバーとして入会されたのは二〇一六年頃であったと思う。千原叡子さんの俳句教室で十年近く学ばれたという彼女は、既にしっかりとした基本を身につけておられたが、みのる選を信じてさらに努力を重ねられ今日の躍進に至っている。

吟行で即吟するという習慣のなかった彼女にとって入会当初は苦吟の連続であったと思うが、屈することなく誰よりも精進され、二、三年後には、「たか子調」なる個性

が開花し始めたのである。

柚子風呂やつんつんと肩つつかれつ

着膨れてペンギン立ちに電車待つ

深々と沈めた肩に柚子が触れて、「お疲れさま」と肩叩きしてくれているように直感したのである。構えて詠んだのではなく柚子風呂に寛いで心遊ばせたとき、ごく自然に授かった作品である。「つ」の文字を重ねたことにより小気味よい感じが強調されている。後者は、「ペンギン立ち」という措辞を見つけたことが手柄で、寒さに耐えながら直立している着ぶくれの様子を具体的に連想させている。こうしたユーモアな句が生れ始めたことが「たか子調」開花の証なのである。

個性が顕著に現れた作品をいくつか取り上げてみよう。肩の力の抜けた詠みっぷりこそが、たか子俳句の真髄である。

本当の色はと外すサングラス
突と浮き白玉団子茹で上がる
俎板に散りしオクラの星集む

句集に散見されるご主人との仲睦まじい老後の生活ぶりもまた微笑ましい。

呼ばないでいま素麺の茹であがる
夫婦してパズルに無口春炬燵

心象を直喩するのではなく客観写生によって、ご夫婦の信頼感と云うか互いの優し

さが包み込まれていることに注目してほしいのである。たか子さんの俳句ライフにおいてご主人の背後なる応援があることに感謝したい。

新型コロナウイルスの流行でさまざまな活動が制約されているが、そんな中であっても、たか子さんの精進はとどまることなく、ここ一、二年の飛躍ぶりは目を見張るものがある。親しい仲間との俳縁を大切にし、共に励ましあって一日も早く楽しい吟行が再開できることを切に祈って序の言葉としたい。

令和三年五月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

お静かにてふ貼り紙や燕の巣

切つ先をそつと押しやり菖蒲の湯

夏草が鉄路を隠すゼロ番線

麦秋の広きを駈けて風あそぶ

軍服の父しか知らず杜若

石一つケルンに積みて山開き

あひ互ひ日傘傾げて路地親し

本当の色はと外すサングラス

呼ばないでいま素麺の茹であがる

ネクタイと無縁となりて夕端居

我が思考回路を乱す猛暑かな

朝風の浦を囲みて船屋群

亡き母に似てきし姉と盆用意

とんばうのへの字に休む竿の先

反論をする気も失せし大暑かな

度を越して慈雨とはならず秋出水

舫ひ舟軋めきあふも秋の声

初秋刀魚なればたつぷり尾にも塩

追伸をさらに書き足す秋灯下

野面積み目地といふ目地草の花

神苑の鹿の目濡れて遠まなこ

草葎踏めばあらぬへバツタ跳ぶ

色変へぬ松砦とす御陵かな

紅葉鯛白磁の皿にはみ出しぬ

地野菜を自慢としたる秋の膳

門前に懸崖菊立つ老舗宿

新走り夫は試飲に余念なく

噴水の天を突いたりしやがんだり

滝風に窓全開す茶店かな

慈雨なれば宿る軒下みな笑顔

空磨くごとくに風の百日紅

道北の直線道路秋澄める

道問へばイヤホン外し爽やかに

ふと目覚め高階に月独り占め

秋茄子の小振りがよろし箸すすむ

水車小屋朽ちて久しや水引草

推敲の一文字決まる秋灯下

前を行く帽子が頼み芒原

一刷けの雲が棚引く良夜かな

揺れやまわずカメラ泣かせの秋桜

若木にもしかと菰巻城の松

茶の花の蕊の重しと俯きぬ

角きりの痕白々と鹿たむろ

冬日差し浴びてにび色鬼瓦

気配りの床暖房の匂座うれし

着膨れてペンギン立ちに電車待つ

きりなしと笑みつ園丁落葉搔

鴨の陣疎にまた蜜に池広し

冬館ゆがむ明治の色ガラス

柚子風呂やっんつんと肩つつかれつ

父母の遺影に語り年祝ふ

周航の唄ハミングす初航路

太箸にやさしさ滲む嫁の筆

初日記旅のチケットなども貼り

粕汁に酔ひたる吾を夫笑ふ

応援の声を攫ひし空つ風

万象の丸み帯びたる雪景色

碧眼も器用に手水寒の水

白息を撒き散らし行く登校子

同年と知りし親しさ日向ぼこ

添へし手に幹の温もり日脚伸ぶ

湯治宿雪吊り松の男ぶり

雪吊りの縄八方へ緊張す

絶え間なき雪解し
ずくや鎖樋

ものの芽にかがみて
心通はせる

春水をざぶざぶ
使ひ糶果つる

春潮にたゆたふごとし淡路島

ひとり居の姉を誘ひて春日傘

春泥も心得てをる盲導犬

芽起しの雨降り注ぐ生駒山

古書店の図鑑コーナー春の塵

花の窓選びて図書を閲覧す

謂れある信長塀や花は葉に

目瞑りてめまとひの群れ駈け抜けし

目の手術癒えて眩しき新樹光

燕の子鳴きたる後の疲れやう

夏服のナースの腕の若さかな

成り行きに任すほかなし髪洗ふ

噴水の肩の力のふいに抜け

飴玉が終点となる蟻の道

突と浮き白玉団子茹で上がる

ジャンプして脚長きこと雨蛙

足元の靴裏返り三尺寝

息災と言ふ幸せや冷奴

気懸りに決着つけしより涼し

帰省の子直ぐに戻りぬ大阪弁

阿波踊り地を這ふやうに進みけり

八千草を備前の壺に老舗宿

息詰めてとる新米の釜の蓋

秋の雲掴むかに伸ぶクレーンかな

大ホー
ルタクトが紡ぐ秋の音

秋天を一太刀に斬る飛行雲

朝寒やスリッパ探す足の裏

混み合うて箸急かさるる走りそば

山車降りてくればパパ顔秋祭

意地悪な風いなしつつ落葉掃く

目瞑りて木の葉しぐれに佇みぬ

倒木の折り重なりて川涸るる

暈蹴る否やに気合寒稽古

老い二人小さき聖樹に星飾る

年用意寺男らはみな素足

うんちくの長き女将やペチカ燃ゆ

平凡がいちばんよろし去年今年

本宮の千木に日の射す淑気かな

今日はしも父の命日冬日燦

春寒し絵踏の島の入り江かな

単線の通過待ちなる余寒かな

熟成をうながす蔵の春灯し

飛び石の角削るごと春の川

外つ国の客も利き酒蔵ぬくし

春泥の道譲るにも困りけり

合掌の形に出でし落の臺

安産の祈願絵馬守る濃紅梅

百磴の半ばにベンチ百千鳥

水琴窟茶庭の春を惜しめとぞ

干し物をたためばほろと花の屑

万葉の歌碑に触れもす棚の藤

道渡り終へし毛虫に安堵しぬ

夏落葉分水嶺はこのあたり

長屋門大鉞振るふごと飛燕

そら豆の莢の無垢なる白さかな

会釈して菖蒲田の畦譲り合ふ

蟻の道たたらを踏みし靴の先

ジャンプして脚長きこと雨蛙

青天井縦横無尽みづすまし

八つ橋の陰頼みとす蝌蚪の国

浮世絵のやうに走りし夕立かな

点と線闇に縛れる蛍かな

白鷺の見え隠れせる苗の丈

行く末の事など話し夕端居

くつきりと潮目を見せて夏来たる

白南風に沖の島影動くごと

猪のヌタ場と化しぬ滝の道

浜木綿や綿津見神へ荒磯道

夫婦滝連理をなして水激つ

木道の一直線や草紅葉

白き顎のぞく編笠風の盆

杉の香の柄杓に掬ふ秋の水

魯山人ゆかりの寺の秋を聞く

秋風の通ふ三和土や太柱

きちきちの高き飛翔にのけぞりぬ

楼門の漆黒の鋌秋の冷え

啄木も此処に佇ちしか冬の海

湯けむりを吹き上ぐ街や冬温し

売り声の大きさを買ふ冬菜市

結界はひともの竹嵯峨小径

落柿舎の障子明かりに集ふ句座

被災地に想ひを馳せて林檎煮る

雑炊に散らして京の冬菜かな

何はともあれ書き出して年用意

裸木に輪廻の芽吹きしかとあり

浮寝鳥嘴差し入れし羽毛かな

鄙びたる山家を訪へば忘れ花

未枯れし物も彩り鄙の郷

祝膳並べし卓に冬日燦

地下街の迷路に疲れ年の暮

乾杯の手を翳しあふ初座敷

子らの夢叶へと祈る初御空

露座仏の印を組む指凍ててをり

占ひ師多き参道女正月

悴みし手に接待のお茶賜ふ

今日もまた平穩に過ぎ蜺汁

梅東風の日に集ひけり祝膳

菜の花のひと碗に卓華やぎし

磯泊まりあをさ尽くしの朝餉かな

パドックへ騎手の一礼草青む

寒暖の日々に思案の旅支度

風力計強東風捉へいま必死

残る鴨ばらばらに散り陣なさず

囀りに負けじと樹下に姦しく

次の歩に二の足を踏む春の泥

春彼岸無沙汰詫びつつ香を焚く

花散らす程にはならず小糠雨

初つばめ見しより憂さの晴れにけり

まくなぎに支離滅裂の手の動き

はしやぐ火を叩いて叱る野焼かな

藤棚をくぐり水亭訪ひにけり

宿涼し噴煙の島借景に

大樗見よや絮降る花が降る

明日は降るてふ空に溶け花あふち

行き過ぎて卯の花の香に戻りけり

山法師いよいよ白し夕帷

御座船の綺羅撒き散らし濠涼し

叩かれて健気な一歩田搔牛

湯上がりテラスの風に足す団扇

燕の子鳴きたる後の疲れやう

汗拭かず由緒をあつく老ガイド

見ら去りて音の整ふ夏の川

ソーダ水泡鎮まるを期に本音

心太茶屋の緑の透けてをり

風通ふ何も置かざる夏座敷

はちすの葉雨にひろげて玉づくり

夜濯ぎをテラスに干して旅終る

そつぽ向くひと叢のあり日輪草

庭師らの地下足袋揃へ三尺寝

父知らぬとは言へ追慕終戦日

体温を超える暑さに怯えけり

岩疾る女滝の腰を揺らす風

俎板に散りしオクラの星集む

をどこ降りして新涼をもたらしぬ

秋灯し待合室は長廊下

刃を嚙んでにつちもさつちも栗南瓜

枝豆を食ぶハモニカを吸ふごとく

鰐口を打てば余韻の音さやか

蝻螂の寄らば切るぞと鎌翳す

鳶職のニツカポツカや秋高し

懐にほとけ三体山粧ふ

陣跡を守る大樹や色鳥来

落ち葉掃く音に微塵も湿りなし

こすもすの揺れてこの里優しうす

我が街の駅前ピアノノ秋惜しむ

終点はどんぐりの樹よ縄電車

紅葉寺案内の沙彌は青つむり

堂縁に座して長居や照紅葉

御手洗の龍の鱗の冬日影

冬耕の人のあとつく烏かな

洞門に手鑿の跡やそぞろ寒

温泉けむりのひと揺らぎして冬空へ

すきま風硫黄の匂ふ湯治宿

冬 日 和 蒼 天 高 く 双 耳 峰

ゆるされよ老いの手抜きの歳用意

年用意外なることは夫の役

ポストまで冬三日月をお供にし

忠魂碑裏は山茶花落ちどころ

国生みの齋庭に凍てしさざれ石

旅終へし安堵我家の雑煮食ぶ

めし屋混む客は手に手に破魔矢持ち

礼者顔して窓に来る雀かな

どんど果つ燃えざる物の蹴り出され

梅堅しガイドの手持ち無沙汰なる

トーストにバター良く伸び春立ちぬ

梅東風に幣ひるがへる朱の鳥居

撫牛のひかるおでこに春兆す

下萌に碑あり淀君自刃の地

春灯し妣の句帳の薄き文字

山に来てもてなしのごと初音聴く

生駒嶺に籠這ふごとく棚霞

夫婦してパズルに無口春炬燵

靴紐を結びなほせばすみれ草

釈迦像は俯向き加減春ぼこり

春塵や阿形の仁王白眼剥き

ゴンドラの揺れに悲鳴や山笑ふ

春愁や通天閣に灯る赤

春の空引つ張つて行く飛行雲

蠟梅の香を内に秘めほぐれそむ

あちこちに甌穴見せて春の汐

兼題句會入選句ほか

門ごとに水の鉢おく路地涼し

寺までの大練堀や蔦紅葉

墓守と野良猫談義苑小春

世界観へと話とぶ日向ぼこ

啓蟄や城の砦は野面積み

列島はあちこち揺れて地虫いづ

麦を踏むみな後ろ手にひと並び

洞窟の古りし神棚黴にほふ

旅名残り機窓に今日の紅葉山

虫喰の屑散らかりし冬菜市

朝靄に溺るる如く山眠る

縁側と云ふ心地良さ日脚伸ぶ

廃線の錆びし
鐵路や下萌ゆる

丈あまる異国の
ベッド明易し

畳むとき日傘吐息の
ごと熱気

里ひとつ隠す速さや霧流る

銀杏の実を踏むまじとたたたら踏む

滝跡の黒々として冬ざるる

煮えたかどつづく大根穴だらけ

犬ふぐり秀でるものの無かりけり

紙風船突く度音の潰れゆく

牡蠣届く覚悟の軍手はめにけり

八千草の乱れ咲きなる扇状地

六本の点の張力みづすまし

あとがき

俳句を趣味として十年近くカルチャーで学んでいましたが、作句に行き詰まり何とか打開しようと模索するなかインターネットを通してウェブサイト「ゴスペル俳句」に出会いました。けれども吟行体験の少なかった私にとりましては戸惑うことばかり、七句出句というハードルの高さに苦しいときもありましたが、お仲間との繋がりが支えとなって何とか続ける事が出来ました。

俳句は、言葉を探して作るのでは無く感じる心をどう現すかだと、みのるさんがいつも教えて下さる意味が句歴十七年を経てやっと臆げに分かってきたように思います。

今は授かった感動や想いをどう「詩」に近付けようかと楽しみながら俳句と向きあえるようになり、ようやく本物の俳句の入口に立てた気持ちでいます。

今年には喜寿と言う節目でもあり背中を押して下さったのでこれまでの作品を纏める事に致しました。今読み返していますと一句一句のシーンが日記のように思い起こされ俳句とは私の人生そのものだとつくづく感じます。

春水をざぶざぶ使ひ糶果つる

パドックへ騎手の一礼草青む

明石漁港の吟行で授かった前句、はじめての競馬場吟行で詠んだ二句目、どちらも実感で詠むことを体験できた懐かしい作品です。句友の皆様とみのるさんとの出逢い

が私の俳句生活を豊かにして下さったことに心から感謝しています。

句集を纏めるにあたり、みのるさんにはいろいろとご助言をいただくとともに、身に余る素敵な序文まで頂戴し本当にありがとうございます。

最後になりましたが、句集の校正と印刷に手を貸して下さいたせいじさん、わかばさんにも厚くお礼申し上げます。また、いつも私の俳句の材料になる所へと考えて旅のプランを練ってくれた主人にも感謝のことばを記しておきたいと思えます。

令和三年五月吉日

古谷 たか子

『飛燕』 古谷たか子句集

令和三年六月一日 印刷

令和三年六月一日 発行